

日英絵本翻訳における視点構図の検討

尾崎 (和賀) 萌子

1. 目的

言語によって話し手の注視点と視座が異なることは Langacker をはじめとして多くの研究者によって指摘されており、広く受け入れられた共通認識となっている。特に日本語は関係性に注目した視座を取ることが多く、英語ではモノに注目した視座を取る傾向にあることが指摘されている (Nisbett & Masuda, 2003)。しかしながら、必ずしもこの通りとは限らないことを本論文では日英翻訳された絵本を題材として指摘する。本論文では Langacker のステージ・モデルを援用しながら、英語でも登場人物の視座に立ったオン・ステージな視点配列を取ることがあることを指摘する。2 節ではまず Langacker のステージ・モデル及び類似したモデルを概観し、3 節では Langacker のステージ・モデルを援用しながら『ロンパーちゃんとふうせん』(酒井、2003) とその翻訳版である *Emily's Balloon* (Sakai, 2006) のテキストを詳細に分析し、最後に 4 節では分析結果の結論を提示する。

2. 視点配列に関する先行研究

言語によって話し手の注視点と視座が異なることに関しては様々なモデルがあるが、その中でも普遍性が高いと考えられているのが Langacker のステージ・モデルである。Langacker(1985)によれば、話し手である認識主体(S)は一般的に図1のようにオフ・ステージからステージ上にいる認識客体(O)を観察し、それを概念化 (conceptualize) し、言語化している。この時、オフ・ステージにいる認識主体は観劇に没頭しているときのように、自分の存在に関する意識が消失しており、自分を参与者として含まずに事態を客観的に把握する。このことを最適視点配列 (optimal viewing arrangement) とする。例えば、(1) John and Mary are running towards the hill. は John と Mary が丘に向かって走っている様子を客観的に見つめ、それを見ている自分の存在は意識から消失している。これに対し、参与者自らがステージ上に立ちオン・ステージとなる場合、認識主体は主体化され、より主観性の高い言語表現となる。例えば、(2) The hills are approaching. では認識主体自らが事態に溶け込んで John や Mary の立場になって丘に近づくのを体験しているのであって、「自己が事態の真ただ中にある」(辻, 2013, p.151) 表現となっている。このことから(1)の最適視点配列に対して (2)は自己中心的視点配列 (egocentric viewing arrangement) と呼ばれている。つまり、最適視点配列と自己中心的視点配列の違いは自意識の存在有無である (Langacker, 1985)。

図1 (Langacker, 2008)

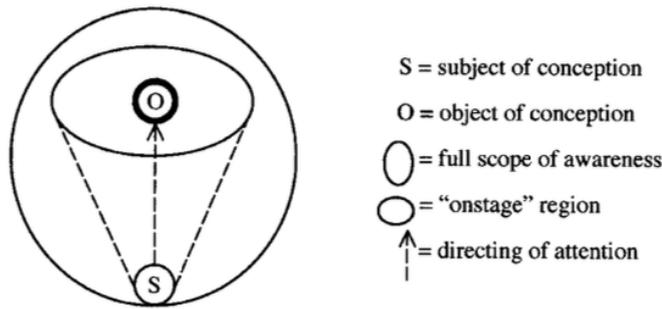
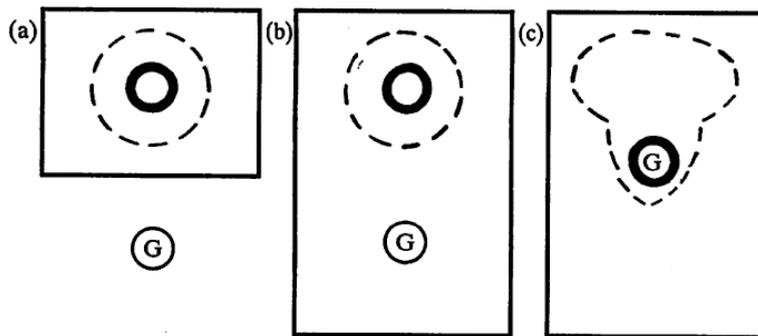


FIGURE 9.1

一般的に、英語にはオフ・ステージかつ最適視点配列の表現が多く、日本語にはオン・ステージかつ自己中心的視点配列の表現が多いと言われている。ただし、自己中心的視点配列と最適視点配列は明白に切り分けられるものではなく、スペクトラム上に存在するものであることに留意する必要がある。図2が示すように、視点配列は objective scene（実線の丸が object、点線の丸が objective scene）に対する ground の位置（G）と scope of predication（四角）に影響を受ける。(a)では G が概念の外に位置し、ground である認識主体は最も主観的な状況にある。(b)は G が scope of predication 上におり、概念に含まれはしないものの、やや自己中心的視点配列寄りになる。(c)では G は概念化の客体と化し、観察する側とされる側の不均衡は中和される。つまり認識主体の主観性は最大化し、最も自己中心的視点配列に近い状態となる。

図2 (Langacker, 1985)



澤(2009)は日本語と英語の視点配列の違いから日本語翻訳された英語の物語文を分析し、日本語の方が過去時物語の中の現在時制が多く、主語の明示が少なく、擬音語や擬態語が多いことを指摘している。しかしながら、英語では擬音語や擬態語が動詞に含まれており、語彙としての擬音語や擬態語が日本語には多いことは、日本語が主観的な視点配列となっているということには直接的につながらず、極度な一般化は避ける必要があると考えられる。例えば「雪がひらひらと

舞い落ちた」と The snowflake fluttered to the ground.では視点配列は同じであり、「ひらひらと舞った」が英語では fluttered の一語に集約されているだけである。

3. 認知モードの違いに基づくデータ分析 — 『ロンパーちゃんとううせん』

本節では『ロンパーちゃんとううせん』(酒井,2003)とその翻訳版である *Emily's Balloon* (Sakai, 2006)のテキストを分析し、英語版と日本語版ではどのような視点配列の違いがみられるかを検討する。『ロンパーちゃんとううせん』は作者自身が翻訳しており、そのため翻訳する際に著作権の問題が生じず、ストーリー性を重視した大胆な意識となっている。絵は日英両方で同じであり、テキストの配置は一部異なるものの、大方同じである。これらの特徴により、この絵本は同じストーリーを伝える上で、英日でどのような表現の違いがあるのかを分析するにおいて適切であると判断し、分析対照とした。表2は *Emily's Balloon* と『ロンパーちゃんとううせん』の全文である。1 ページの内容を 1 行としており、表記は全て原文通りとしている。

表 2: *Emily's Balloon* と『ロンパーちゃんとううせん』の全文

	英語	日本語
1	One afternoon, Emily got a balloon.	ロンパーちゃんは きょう まちで ふうせんを もらったの
2	Oops!	とんでいってしまわないように
3	The balloon was tied to her finger.	ゆびに くくってもらったの
4	And then it came home with her.	だから ふうせんは ちゃんと ロンパーちゃんのおうちに くれました
5	Let's take that off.	さあ もう あんしん ヒモを ほどいて
6	Whee!	そおれ ポーン ポーン ポーン
7		あら あらら
8	Uh-Oh.	とどかない 「おかあさん おかあさん」
9	Here you go,	「やれやれ どうぞ」はい ポーン ポーン
10	Again?	あら あらら
11	Emily's mother tied the string in a loop.	「やれやれ これじゃあ かなわない」ロンパーちゃんのおうせんは またくくられることになりました
12	And put the loop around Emily's spoon.	「でもね かあさん くくるのに ちょっと くふうを してあげよう」

13	Look!	「ほうら どうぞ ロンパーちゃん」
14	It floats, but it doesn't fly away!	おや まあ みてみて この ふうせん ういているのに とんでいかない とん でいかないのに ういている
15	Emily and the balloon went into the yard.	ステキ！これなら いっしょに あそべ る ロンパーちゃんと ふうせんは い っしょに おにわに いきました
16	They picked flowers.	「ほうら ふうせん きれいでしょ」
17	Emily made a beautiful crown for the balloon, and one for herself.	ロンパーちゃんは ふうせんに きれい な かんむり つくって あげて
18	They played house.	じぶんも おはなの かんむり つけて ふたりで いっしょに ままごと しま した 「はい どうぞ いただきます」 「はい どうも ごちそうさま」
19	Then whoosh went the wind.	ところが ビュウ！かぜが ふいて
20	The balloon! Emily's balloon!	ふうせんが ロンパーちゃんの ふうせ んが
21	There! In the tree!	あー なんてこと！
22	It's stuck, Emily. I can't get it down. I'm sorry.	ロンパーちゃんの おかあさん いっし ょうけんめい やったけど 暗くなるま で がんばったけど 「もうあきらめま しょう ロンパーちゃん」
22	Emily missed the balloon. Dinner didn't taste good without it.	あきらめきれない ロンパーちゃん ご はんも ちっとも おいしくない
23	We wanted to eat together.	「だって わたし ふうせんと いっし ょに たべる やくそく したのに」
24	Then we would put on our pajamas, and brush our teeth,	それから いっしょに ハミガキもして パジャマきて
25	and go to sleep.	いっしょに ふとんで ねる やくそく したのに
26	Tomorrow, I'll borrow a ladder and get it down. Really? Really. Really and truly? Really and truly. Goodnight, honey.	「わかった わかった ロンパーちゃん あしたになったら かあさんが はしご を かりて あげるから きっと とっ て あげるから」「ほんとうに？ おか あさん」「ええ ほんとうよ ロンパー ちゃん」「ほんとうに ほんとうに？」

		「ええ ほんとうに ほんとうよ ロンパーちゃん」
27	But Emily couldn't stop thinking about the balloon. Was it still there?	やっと なきやみ ロンパーちゃん しゅっくりも だんだん おさまって なみだの あとも かわいてきて…
28	She looked. There it was, nestled in the tree. It looked just like the moon.	そうして ポツリと こう おもったの (ああ ふうせん ロンパーちゃんのふうせんはー)
29	Goodnight.	(おつきさん みたいよ・・・)

本書はまずタイトルが日本語と英語とでは異なる。日本語ではロンパーちゃんと風船という2つの主体に注視点が当てられているのに対し、英語では *Emily's Balloon* とあるように主体が風船となっている。この認識の違いは本のストーリー展開にも影響を及ぼしており、英語の方では風船の行方を中心とした書き方であるのに対し、日本語の方ではロンパーちゃんと風船の関わり合いの方に主眼が置かれている。なお、ロンパーちゃんは英語版では Emily という、英語圏で聞き馴染みのある名前に差し替えられているが、本論文では統一して「ロンパーちゃん」とする。

これは、「注視点」に注目すれば、「英語ではモノに注目する傾向があるのに対して日本語では関係に注目する傾向がある」という、通常の日英対照の議論 (Nisbett & Masuda, 2003) と整合するものになる。しかしながら、視座に注目すれば、日本語版では視点人物が登場人物とは独立の語り手で、語り手の視座から出来事を述べているのに対して、英語版では、視点人物がロンパーちゃんであり、彼女の視座から出来事を述べていると考えることができる。即ち、この絵本においては先行研究で指摘されていることとは逆に、英語版ではロンパーちゃんの視点からの自己中心的視点配列になっているのに対し、日本語版では語り手の視点からの最適視点配列となっている。図2に照らし合わせれば、英語版は(c)に該当し、日本語版は(b)に該当すると言える。

この点は、28-29ページの 'She looked. There it was, nestled in the tree. It looked just like the moon. Goodnight.' においても観察できる。これは風船を見たロンパーちゃんの「見え」を記述しており、視点人物がロンパーちゃんになっている。同様に、2ページではロンパーちゃんの近くで風船をもらった子供が紐を放してしまっただけで風船が空に飛んでいってしまう様子が描かれており、その下に英語版では 'Oops!' 日本語版では「とんでいってしまわないように」と書かれている。このように、日本語版では、まだ手元に風船を持っていて、とんでいってしまわないように指にくくってもらうという出来事の描写語り手の視座から述べられているのに対し、英語の Oops は Emily を視点人物とした表現になっている。

同様に、8 ページでは、風船を手放してしまったロンパーちゃんの絵の下に、英語版では ‘Uh-Oh.’ と一言だけロンパーちゃんの視座から書いてあるのに対し、日本語版では「とどかない『おかあさん おかあさん』」と状況説明とロンパーちゃんのセリフが最適視点配列で詳細に描写されている。27 ページも、‘But Emily couldn't stop thinking about the balloon.’ はロンパーちゃんについて客観的に描写されているという点で最適視点配列だが、‘Was it still there?’ はロンパーちゃん自身の思考内容であり、極めて自己中心的な視点配列である。これに対し、対訳となっている日本語版では「やっと なきやみ ロンパーちゃんしゃっくりも だんだん おさまって なみだの あとも かわいてきて…」とあるように、最適視点配列のみの表現となっている。

一方で、日本語の方が自己中心的視点配列で、英語が最適視点配列のページもある。12 ページの ‘And put the loop around Emily's spoon.’ (「でもね かあさん くくるのに ちょっと くふうを してあげよう」) の英語版は語り手が情景描写をしている最適視点配列だが、日本語版の方は鉤括弧がついていることでテキストの内容が台詞となりロンパーちゃんの見えが表現されている。同様のことが 16 ページの ‘They picked flowers.’ (「ほうら ふうせん きれいでしょ」) でも言える。しかしながら、この絵本に限って言えばこのような例は少数であり、大半のテキストに関しては英語版では登場人物の視座から描かれた自己中心的視点配列で、日本語版では物語の語り手が客観的な視座から描写している最適視点配列となっている。

4. 結論

英語は客観的視点から言語表現することが多く、日本語では主観的視点から言語表現する傾向が強いことは一般に認められており、認知言語学においては Langacker (1985, 2008) のステージ・モデルや視点配列、池上 (2006) の客観的把握と主観的把握、中村(2004)の I モードと D モードなど、これまで様々な理論をもってこのことが説明されてきた。本論文では普遍性の高い Langacker の視点配列とステージ・モデルを援用し、『ロンパーちゃんとふうせん』(酒井、2003) とその翻訳版である *Emily's Balloon* (Sakai, 2006) のテキストを比較することで、同じ物語を伝える上で両言語にどのような視点の違いがあるかを検討した。

その結果、必ずしも英語は最適視点配列が多く、日本語は自己中心的視点配列が多いとは限らないことがわかった。確かに英語版の方は最適視点配列からの報告的な叙述もあり、日本語版は自己中心的視点配列も見られたが、そうではない部分も多い。例えば *Emily's Balloon* の ‘Oops!’ は語り手の視座から、ロンパーちゃんの後ろにいる風船を手放してしまった子供に対する感情が言語化されている。また、原作の「やっと なきやみ ロンパーちゃんしゃっくりも だんだん おさまって なみだの あとも かわいてきて…」という最適視点配列の描写は英語では ‘But Emily couldn't stop thinking about the balloon. Was it still there?’ と意識されており、この ‘Was it still there?’ はロンパーちゃんの内的思考を表す自己中心的視点配列となっている。

この点において、これまでの日英対照研究で言われている、日本語は関係性に注目し、英語はモノに注目するという主張とは異なり、英語の方が日本語よりも関係性に焦点を当てるケースがあることが示唆された。今後、より多くの絵本を対象とした分析を行い、これがある程度一般化できる事象なのか、それともこの絵本特有の傾向なのかを判別することが期待される。

参照文献

- Langacker, R.W. 1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." In: John Heiman(ed.) *Iconicity in Syntax*, John Benjamins, 109-150.
- Langacker, R.W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. OUP USA.
- Nisbett, R. E., & Masuda.T. 2003. "Culture and Point of View", *Proceedings of the National Academy of Science*, 100-19, 11163-11170.
- Sakai, K. 2006. *Emily's Balloon*. Chronical Books LLC.
- 池上 嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』NHK 出版.
- 酒井 駒子 (2003. 『ロンパーちゃんとふうせん』白泉社.
- 澤 泰人. 2009. 「日英語の物語文翻訳に見られる事態認識の様式と言語表現の差異」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』37, 141-152.
- 辻 幸夫 編. 2013. 『新編 認知言語学キーワード辞典』研究社.
- 中村 芳久. 2004. 「主観性の言語学:主観性と文法構造・構文」中村芳久編『認知文法論 II』大修館書店, 3-51.